

みんぱく 私の逸品 ギター

標本番号 H00984660
地域 ス페인(推定)
収集年 1988年

押しお 押尾コータロー

僕は大阪の出身です。みんぱくはこのあたりの遠足の定番コースで、僕も小学生のころに遊びに来ました。当時は、暗くて、おどろおどろしいお面などがたくさんあって、気持ち悪いな、怖いなという印象がありました。そして、当時の記憶を抱いたまま大人になって専門家やマニアックな人しか立ち寄れない場所というイメージを漠然ともっていました。

ところが今回、久しぶりにみんぱくを訪れ、新しい音楽展示をみて、随分イメージが変わりました。いい意味で敷居が低いというか、雰囲気も明るくなっている。特別な知識をもたない人でも楽しめる、興味をもつことができる。そして何かを見つけることができる。そんな印象をもちました。

たとえば映像による展示。とくに楽器の場合、モノだけを見ていてもわかりづらいことがたくさんあるのではないでしょうか。

それが豊富な音や映像を通じて、演奏方法や奏でられる時場所、そして

かわる人びとの様子を知ることができる。モノを展示する博物館で「音を感じる」ことができるんです。

もちろん、楽器そのものから想像するという楽しみもあります。僕がとくに興味をもったのは「ギター」のコーナーです。サウンドホールのサイズや弦の数、素材、大きさ、それに収集された地域などから、音やその楽

器を奏でる人びとの暮らし、楽器の構造から見える地域的な特色やその伝播などにも思いをめぐらすことができます。

それ以外にも、ギター前史ともいえる各地域の伝統的な弦楽器とともに、僕たちにもなじみのある現代のギターが並べられていて、楽器の変遷を追いつつ、短時間でまとめて見ることができたことも面白かった。スペインのフラメンコギターや南米のチャランゴ、それらと一緒に自分が中学生のころに使っていたヤマハのギター、マーチンやギブソンといった当時あこがれだった海外のギターを目にすることができます。

展示場に並ぶギターのなかで、とくに惹かれたのは、全体に螺鈿の装飾がほどこされてるギターです。この楽器を作った人の職人魂を

感じました。比較的小さなボディからは優しい音が聞こえてくるような気がする。

そして、これだけの美しい装飾をほどこしたギターは、どんな人の手にわたったのだろうか、などと想像もふくらみました。



プロフィール

2002年7月アコースティック・ギタリストとしてメジャーデビューし、同年10月に全米メジャーデビュー。オープンチューニングを駆使した迫力あるギターアレンジや、あたたかく繊細なギタープレイは世代を超えて多くの人びとに支持を受けている。

<http://www.kotaro-oshio.com/>